

牛頭法融と三論宗

宇井伯壽

一

會て牛頭法融と其傳統とを論じて、道信―法融―智巖の師資相承は、たとひ古い記録には明言せられて居なくとも決して承認せられないものではないことを明かにしたが、法融（五九四―六五七）は道信に遇ふ以前に既に自得せる所があり、道信に遇ふて更に一段の進境を得て、達摩禪に入つた人であつたことをも述べて置いた。圭峯宗密のいふ如く、法融は般若皆空の理を悟つて居たのが、道信によつて、その空處に於て不空の妙性を悟解するを得たのであつたのである。この法融の諸法本より空、迷情は妄執に過ぎないと悟つて居たのは、續高僧傳によれば、十九歳（六一二）で茅山に入りて出家し、曇法師にによつて提撕せられ、空靜林に於て二十年間凝心安默した結果であつたこととなるが、曇法師は、三論之匠といはれる如く、三論宗の達人であつたのであるから、法融も亦三論宗によつて自得があつた理である。従つて、法融の一代を二分して考へると、道信に遇ふまでの三論宗の宗匠としての前期と、道信に遇ふて後の達摩禪の祖師としての後期とになる。此後期が牛頭宗の第一祖として、所謂東南之正法を建てた時期であ

一

る。

法融が三論宗匠となるまでには單に冥法師にのみ依つて居たのではなくして、猶他の學匠の門を叩いたこともあつたと考へられる。唐惠祥の弘贊法華傳卷三に法融の傳を擧げて

釋法融……負_レ笈_レ尋_レ師、不_レ遠_三千里。乃依_三第山豐樂寺大明法師_一、聽_三三論及華嚴、大品、大集、維摩、法華等諸經_一、伏膺累年、妙探_三機奧_一、雖_三久爲_三爲門侶_一、人未_三之識_二也。

大明既滅、又聽_三鹽官邃法師講_三諸經論_一……而融謙_レ光藏_レ用、默契_三於心_一……後有_三永嘉永安寺曠法師、會稽一音寺敏法師、鍾山定林寺旻法師_一、並當時義海、融遍_三遊座下_一、忻然獨得。後歸_三丹陽牛頭山幽棲寺_一……

といふて居るのを見ると、ここに少なくとも、大明法師、邃法師、曠法師、敏法師、旻法師の五人の教を受けたことがいはれて居るのである。弘贊法華傳の成つた年代は明かでないが、其中には神龍二年（七〇六）のことが載せられて居るから、七〇六年北宗神秀の寂年よりも後に出來た書で、續高僧傳の法融傳よりも四十年以後に成り、牛頭五祖智威（七二二寂）の時代を遡らないが、然し唐代の書には相違ないから、其説は一應は考へて見るべきである。種々なる點が他の僧傳などの記載と必ずしも矛盾して居ない。

二

大明法師について、第山豐樂寺とあるが、第は茅の寫誤に相違ない。弘贊法華傳は朝鮮に傳はり、我國に入つたもので、其間寫本であつたのであるから、茅山が第山となる程度のこととは止むを得ない。茅山大明法師は三論宗の興皇寺法朗の遺囑を受けた人で、嘉祥大師吉藏の同門であり、五八一年、法朗の寂するや、即日門人を領して茅山に入つて、終身出でなかつたといはれて居る。法朗の弟子に同じく明法師といふのがあり、それが小明法師といはれ、蘇州

永定寺に居て、弟子に義褒（六一一—六六一）があつたのに對して、大明法師といはれるのであつて、名の一字が傳はらないのである。この大明法師の弟子には、少なくとも、下の四人がある。

慧嵩（五四七—六三三）、承苞山明法師、興皇遺囑、世稱郢匠、通國瞻仰、因往從之。

慧稜（五七六—六四〇）、十六乃往荊州茅山明法師下、依位伏聽、問經大意、深有奇理、召入房中、三年曲教、惟陳不有有也。

法敏（五七九—六四五）、入茅山、聽明法師三論、……年二十三、又聽高麗實公講大乘經論。

慧瓊（五七一—六四九）、周滅法後、南往陳朝、入茅山、聽明師三論、又入栖霞、聽懸布法師四論、小品、涅槃等。

慧嵩は大業年（六〇五—六一六）には成都に入ることになるから、如何に遅くとも、大明法師の下には六〇五年まで居たのみであり、慧稜の十六歳は五九一年で、三年居たとすれば五九三年までは居たし、法敏は八歳即ち五八六年出家し、英禪師の弟子となり、それから何年かに茅山に入り、二十三歳即ち六〇一年まで居たであらう點で見ると、大明法師は確に五八一—六〇五年の間は茅山に居たと考へられる。然し、前記法融の傳によれば、茅山に入つて、伏膺累年とあるが、この茅山に入つたのは、續高僧傳によれば、六一二年であるから、之によれば、大明法師は九一二年よりも數年後に寂したのであらう。大體、九一五年或は九二〇年頃と見るべきか。法融の二十二歳或は二十七歳頃である。そして法融の牛頭山幽棲寺に入つたのは六四三年、五十歳の時であるから、それよりも二十七年或は二十二年の後のことである。此間に他の四師に遇ふことと二十年の宴默とがあつたことになる。

續高僧傳では茅山で冥法師によつて周羅を剃除して、服勤し道を請したとせられて居るのであるから、恐らく冥法師の剃髮を受けて教導を受け、又大明法師の講を聴いたのであらう。冥法師は全く不明な人であるが、大明法師が門

人を領して茅山に入つたといはれる門人中の一人であらうか。大明法師は法朗の許に在つて、法朗の室の東柱の席に居し移らざること八年、口に談述なく身に妄渉なく、衆、癡明と目づくといはれた程であるから、自身の弟子門人などのあらう理はないから、茅山に率ゐて入つた門人といふのは、勿論法朗の門人であつたのであり、法朗の會下は常に千人であつたといはれるから、其中で大明法師に心服した人々であつたのである。然し、率ゐられて茅山に入つたとすれば、これ即ち此等の人々は大明法師の門下となつたのであるから、吳法師も此中の一人であつたのであらうと想像せられる。法融はこの吳法師に依つたのであるが、吳法師も何年頃まで居たか、全く不明である。

法融の師の中で最もよく判る人は會稽一音寺敏法師で、これは明法師の弟子の法敏である。法敏は貞觀元年（六二七）丹陽で華嚴、涅槃を講じ、二年（六二八）越州一音寺に住し、極めて多數のものが講を聴き、十九年（六四五）一度會稽靜林寺に往きて華嚴を講じ、其夏一音寺に歸り、其八月寂した人である。一音寺も靜林寺も越州會稽にあるから、續高僧傳にも華嚴傳にも越州靜林寺法敏とし、弟子法聰（五八六—六五六）の傳には會稽一音寺慧敏とあるし道信並びに智巖の弟子善伏（六六〇寂）の傳には越州敏法師とある。慧敏ともいふと見える。法敏は一音寺に六二八—六四五年居たから、法融は其初期頃に遇ふたのであらう。

永嘉永安寺曠法師は、前記小明法師の弟子義褒が小明法師を辭して、縉雲山婺州永安寺曠法師の所に往つたといふ曠法師で、曠法師の傳は詳かではないが、興皇法朗の弟子で、大明法師、小明法師、嘉祥大師の同門であり、法朗と同門の長干寺智辯、禪衆寺慧勇、栖霞寺慧布にも重むぜられた人である。義褒は此人に三十餘年も従つたといはれる。義褒は玄奘の澤場に入つたが、其前に東陽金華法幢寺に住して居たから、これより推して考へると、法融は大體法敏に遇ふた頃にこの曠法師にも遇ふたのであらう。

然るに、鹽官邃法師と鍾山定林寺旻法師とについては、左程に、明確でない。平安朝最初期に著はされた安澄の中論疏記に、述義といふ書を引いて、吉藏師得業弟子碩、旻、邃等といふて居る。述義の年代は明かでないが、奈良朝のものなることは疑なく、安澄は又三論宗第三傳の道慈の弟子で而も入唐した善議に三論を受けた人であるから、三論宗の傳説にはよく通じて居たに相違ない。この述義のいふ旻と邃とは恐らく旻法師、邃法師と同一人であらうから然らば、此二人は嘉祥大師の弟子であることになる。弘贊法華傳卷三に唐海虞山慧旻の傳があつて、慧旻は貞觀末年七十七歳で寂したから、大體五七三―六四九年の人で、嘉祥大師の弟子としても年代は相應するが、傳記の中には嘉祥大師の弟子とも記されて居ないし、又鍾山定林寺に居たか否かも明かにせられて居ない。故に、如何にもこの慧旻を旻法師といふたのかと思はれるも、目下としては想定し兼ねる。然し、述義によつて邃と旻とを嘉祥大師と見るにしても、または然らずとするも、兩人が三論系の人たるに於ては恐らく疑を挿む要はないであらう。

三

弘贊法華傳は法華に關する事蹟を中心として述べる目的の書であるから、何れの人の傳記も、法華以外については詳しく述べないのみならず、意識的に省略して居るが爲に、此書のみで、人々の傳記の詳細を知ることが不可能である。それにも拘らず法融の師については、五人までも擧げ、而も五人が三論系の人たることが考へられ得るから、法融と三論宗との關係の極めて密接なことが明知せられるのである。三論宗は、特に僧詮以來禪的であり、法朗も曾ては薑良耶舍の弟子寶誌禪師に禪法を受け、更に僧詮に従ふたのであるから、禪的であつたであらうし、それが大明法師に繼がれ、旻法師にも承けられ、これによつて法融も禪的に空觀を自得して禪的であつたのである。その法融の三論的の禪が遂に又道信によつて更に達摩禪に進むたのである。現今學者は、達摩系統の禪は三論宗の影響を受け、三

論宗の禪の發達に成つたとなさむとすることもあるが、歴史的の事實は全く逆である。法朗と同門の慧布は慧可に諮問して居るし、法融は道信に導かれたのであつて、達摩系統が三論宗から影響を受けた事實は殆ど考へられない。勿論禪宗が般若皆空の説と密接の關係あることは實際であるが、然し、その般若皆空は直接三論宗の説であるといふのではない。

一般に支那佛教史の研究は其重要なのに比して却つて進むで居らぬ憾があるが、從來現はれた研究を見ると、殊に禪宗の理解が正確でないと考へられる。吾々から見れば、この一般的の缺點が支那佛教史研究の進歩を妨げて居る一原因であるといはざるを得ない。試みに見よ。唐末五代に於て武宗と世宗との排佛の法難を経ても、依然として佛教の勢力を維持するを得たのは獨り禪宗に據つたのではないか。而も宋代に入つてからでも、益發展したのは唯禪宗のみで、他宗は凡て恢復再興の程度で、それすら永續したとはいへないし、勿論新な發達進歩があつたのではない。従つて宋代以後は殆ど禪宗史が支那佛教史であるかの如き觀を與へる。然るにこの禪宗史が毫も研究せられて居ないのであるから、支那佛教史の過半が全く未開拓の荒野となつて居る。最近多少此方面を明かにせむとする新進の學者の現はれむとして居るのは誠に矚目すべく又大に推奨すべき慶事であると考へられる。